

0歳からの保育が及ぼす影響に関する縦断的研究 3： 心理社会的発達と保育経験との関連についての横断的検討

○安治陽子¹ 網野武博² 尾木まり³ 高辻千恵¹ 増田まゆみ⁴ 柘尾勲⁴ 木村昭仁⁵ 硯川和歌子⁶

(¹東京大学大学院教育学研究科 ²上智大学文学部 ³子どもの領域研究所

⁴目白大学人間社会学部 ⁵竜雲寺保育園 ⁶かっぱ保育園)

【問題と目的】

早期から保育を経験することが子どもの発達に悪影響を及ぼすのではないかと、という危惧は、一般的にも、また専門家の間にも存在している(網野ら、2003)。その背景には、「3歳までは(母)親が子育てに専念して育てるべき」といういわゆる「三歳児神話」が根強くあるといえるだろう。乳児保育の需要が高まり、実際に発達早期から保育を経験する子どもが増加している現在、保育が子どもの発達にいかなる影響を及ぼすのかについて、価値論、観念論を超えた実証的な検討が必要であろう。そこで本研究では、乳幼児期における保育経験やそれについての認知が、その後の心理社会的発達といかなる関連を持つのかについて明らかにすることを目的とする。その際、保育が子どもの発達に及ぼす中・長期的な影響について検討するため、思春期・青年期にあたる中学生、高校生を対象として横断的な調査を行う。また、心理社会的発達については、個人の発達と適応に深く関与していると考えられる領域、すなわち親子関係の発達、仲間関係における適応、自尊心の発達、行動問題の発達を取り上げ、保育経験や保育についての認知との関連を検討する。

【方法】

- ①調査対象：A市の中学生・高校生 2532名(中学3校1357名、高校4校1175名)(回収率93.1%)、およびその保護者2007名(回収率73.8%)。子どもの年齢は、平均14.9歳(SD=1.6, レンジ12-19歳)。ただし、保育経験について正確なデータを得るため、保護者の回答も揃っている1983名(女子1158名(59.7%)、男子783名(40.3%)、性別不明42名)について分析を行った。
- ②調査時期：2002年11月～12月。
- ③調査手続き：子ども調査用質問紙と保護者調査用質問紙を作成した。いずれも無記名回答だが、親子ペアを識別するための番号を表紙につけ、学校を通して配布回収した。プライバシーに配慮し、回答者自身が個別の封筒に入れ、封をしたものを回収した。

【結果と考察】

まず、質問項目について、項目群ごとに因子分析(主成分分解、プロマックス回転)を行い、以下の12変数を生成した。(1)～(6)は乳幼児期を回顧しての回答、(7)～(12)は現在についての回答を求めたものである。(10)のみ5件法、他はいずれも4件法である。

- (1) 母親の就労の肯定 (5項目, $\alpha=.79$)
- (2) 保育経験の肯定的評価 (8項目, $\alpha=.84$)
- (3) 保育に伴う分離時の父親希求 (4項目, $\alpha=.71$)
- (4) 父親のゆとりある関わり (3項目, $\alpha=.60$)
- (5) 保育に伴う分離時の母親希求 (4項目, $\alpha=.75$)
- (6) 母親のゆとりある関わり (3項目, $\alpha=.60$)
- (7) 父子関係の安定性 (14項目, $\alpha=.87$)
- (8) 母子関係の安定性 (14項目, $\alpha=.87$)

(9) 仲間関係における適応 (8項目, $\alpha=.66$)

(10) 自尊心 (9項目, $\alpha=.79$): 自尊感情尺度(山本、松井、山城、1982)全10項目から因子分析により9項目を採用。

(11) 外在的行動問題 (8項目, $\alpha=.81$)

(12) 内在的行動問題 (2項目, $\alpha=.74$)

(1) 相関分析(表1)

現在の「父子関係の安定性」は、乳幼児期において父親は普段からよく関わってくれたという認識(「父親のゆとりある関わり」との間)に有意な正の相関が見られた($r=.53, p<.0001$)。同様に、現在の「母子関係の安定性」と、乳幼児期の「母親のゆとりある関わり」との間にも正の相関が見られた($r=.52, p<.0001$)。回顧データであるため、実際に幼少期において、そのようなゆとりのある応答的な関わりをどの程度受けていたのかについて確かめることはできない。また、現在の親子関係の安定性が回顧データに影響を与えているとも考えられる。しかし、少なくとも子ども自身が「幼い頃、忙しくてもよく関わってくれた」と認識していることが、思春期・青年期における親子関係の安定に関連していることが示された。

さらに、現在の「父子関係の安定性」は、保育に伴う父親との分離に対して、寂しい気持ちや父親を求める気持ちを感じていたこと(「分離時の父親希求」と有意な正の相関が見られた($r=.33, p<.0001$))。同様に、現在の「母子関係の安定性」は、「分離時の母親希求」と関連していた($r=.29, p<.0001$)。保育に伴う親との分離は寂しかった、家にいてほしかった、という子どもの認知は、思春期・青年期における親子関係の安定性を阻害するのではなく、むしろポジティブな関連を持っていることが示された。

「仲間関係における適応」、「自尊心」、盗みや暴力、タバコなど非行に関する項目からなる「外在的行動問題」、不登校傾向や引きこもり傾向を表す「内在的行動問題」は、いずれも、保育経験の評価や保育に伴う親との分離に関する認知との間に強い関連は見られなかった。また、これら4変数は、親子関係の安定性との間にも低い相関しか見られなかった(有意ではあるがサンプルサイズが大きいことを考慮)。したがって、仲間への不適応、自尊心の低さ、行動問題は、乳幼児期の保育経験やそれに伴う親との分離に起因するのではなく、また現在の親子関係に強く規定されるのでもないということが推測される。

その一方で、「内在的行動問題」は「仲間関係における適応」($r=-.36, p<.0001$)および「自尊心」($r=-.33, p<.0001$)との間にそれぞれ負の相関が見られ、仲間関係の困難や自尊心の傷つき、といった現在の心理社会的不適応と関連があることが示された。これらの結果から、「内在的行動問題」の発達は、乳幼児期の保育経験やそれに伴う親との分離、あるいは親子関係に起因するというよりも、むしろ家庭外での仲間関係のあり方や学校での適応といった、現在の心理社会的適応に大きく依拠しているのではないかと考えられる。

(2) 分散分析：保育経験×性別による比較

現在の親子関係、心理社会的発達に関する変数(7)～(12)をそれぞれ従属変数とし、保育経験×性別の2要因分散分析を行った(図1～図6)。保育経験は、保護者の回答に基づいて子どもの回答を適宜修正した結果、①0歳から保育所61名、②1～3歳前から保育所136名、③3歳から保育所413名、④幼稚園985名、⑤保育所だが始期不明49名、⑥保育所と幼稚園両方を経験236名、⑦その他87名、不明16名であったが、分析においては①～④の4水準とした。

いずれも全体として5%水準で有意であったが、交互作用はいずれも有意でなく、性別によって保育経験の効果のあり方が異なることはないということが示された。性別の主効果はいずれも5%水準で有意であった(性差については図を参照されたい)。保育経験の主効果が有意であったのは、「母子関係の安定性」「外在的行動問題」「内在的行動問題」の3変数であった。これらについて、Scheffeの方法による多重比較を行った結果、「母子関係の安定性」は、②群(1～3歳前から保育所)が③群(3歳から保育所)および④群(幼稚園)よりも有意に高かった(図2)。すなわち、1～3歳前から保育を経験した群は、3歳以降に保育(保育所・幼稚園)を経験した群よりも思春期・青年期の母子関係において高い安定性を示すという結果であり、「三歳児神話」に代表されるような、低年齢から保育を経験することが母子関係を阻害するのではないかという危惧は、妥当でないといえる。

また、「外在的行動問題」および「内在的行動問題」は、③群(3歳から保育所)が④群(幼稚園)よりも有意に高かった(図5、図6)。より詳細に検討するため、各変数を構成する10項目について、それぞれ同様の2要因分散分析を行った結果、「外在的行動問題」を構成する項目のうち、盗みや暴力に関する項目においては保育経験の主効果は有意でなく、「タバコを吸ってみることがあった」という項目においてのみ有意(③群>②群④群)であった。「内在的行動問題」では「学校へ行きたくないことがたびたびあった」という不登校傾向を表す項目においてのみ、③群>④群という群間差が見られた。上記

(1)の相関分析の結果から、行動問題は、保育経験の評価や親との分離に関する認識と関連が見られなかった。その一方で、「内在的行動問題」は、仲間関係における適応や自尊心の発達との関連が見られた(表1)。したがって、3歳以降に保育所に通った群のタバコへの接近や不登校傾向の高さは、少なくとも子ども自身の認知においては、保育経験に直接起因すると考えることは妥当でなく、むしろ、この群における仲間関係のあり方、学校への適応といった、現在の心理社会的適応の説明力がより大きいと考えられる。この点については、今後さらに検討が必要である。その際、いずれの結果も、低年齢(3歳未満)から保育を経験することが行動問題の発達に関連しているという結果ではなく、また保育所経験群全体が幼稚園経験群よりも行動問題を発達させているという結果でもないことに、十分留意する必要がある。

表1 変数間の相関係数 (太字はr=.30以上)

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)
(1) 母親の就労の肯定												
(2) 保育経験の肯定的評価	.20											
(3) 分離時の父親希求	.26	.19										
(4) 父親のゆとりある関わり	.05	.21	.19									
(5) 分離時の母親希求	.36	.15	.46	-.01								
(6) 母親のゆとりある関わり	.12	.25	.07	.42	.15							
(7) 父子関係の安定性	.12	.23	.33	.53	.01	.31						
(8) 母子関係の安定性	.22	.29	.16	.30	.29	.52	.48					
(9) 仲間関係における適応	.14	.24	.07	.19	.03	.23	.24	.27				
(10) 自尊心	.05	.19	.06	.18	.00	.15	.24	.21	.26			
(11) 外在的行動問題	-.07	-.07	-.05	-.15	-.05	-.17	-.21	-.25	-.14	-.06		
(12) 内在的行動問題	-.03	-.21	-.04	-.15	.06	-.15	-.22	-.17	-.36	-.33	.28	

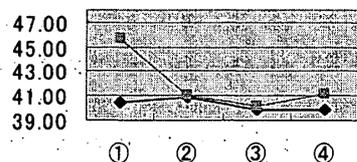


図1 父子関係の安定性

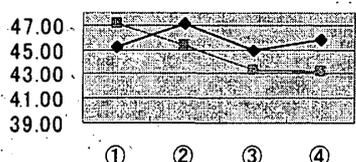


図2 母子関係の安定性

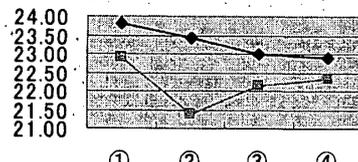


図3 仲間関係における適応

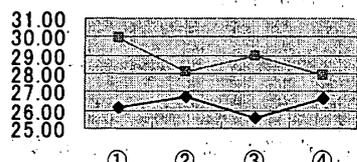


図4 自尊心

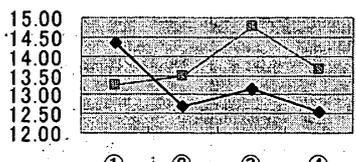


図5 外在的行動問題

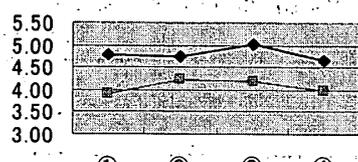


図6 内在的行動問題

注) ①0歳から保育所 ②1～3歳前から保育所 ③3歳から保育所 ④幼稚園

◆— 女子 Mean □— 男子 Mean